

## 1はじめに

私は子どもと地域との関わりについて研究した。

このテーマに興味を持った研究動機は、私が中学生の時に偶然YouTubeで見た「子宮に沈める」という映画がきっかけだ。この作品は実際にあった事件をもとに描かれている。

この事件とは、2010年7月30日に起こった大阪西区のマンションで3歳の女の子と1歳9か月の男の子が母親の育児放棄によって餓死した事件のことである。発見から死後50日ほど経っていた。なお遺体が発見されるまで「子供の泣き声がする」と虐待を疑う通報が児童相談所に何度かあったが発覚しなかった。この事件をきっかけに「ネグレクト」という言葉が世に知れ渡ることとなった。あらすじは、母親と父親と子ども2人の4人家族が暮らしていた。3歳の娘と1歳の息子を愛情深く大切に育てる子ども思いの母親だったが、夫に離婚を告げられ、シングルマザーとなる。新生活が始まり、良き母であろうとするものの母親1人で幼い子ども二人を育てることは精神的にも金銭的にも辛いことだった。

周りに頼れる人もおらず、育児、家事、仕事に追われ育児放棄がエスカレートする。いつしか子どもをアパートに置き去りにしてしまい、子ども達が必死に生きようとする様子を生々しく描いた作品だ。

そして、この映画は児童虐待防止全国ネットワークが運営する「オレンジリボン運動」の推薦映画に認定された。「オレンジリボン運動」とは、NPO法人全国虐待防止全国ネットワークが主体となって活動する、子ども虐待防止のシンボルマークとしてオレンジリボンを広めることで、子ども虐待をなくすことを呼びかける市民運動である。不幸を無くそうというこの運動は年を増すごとに拡大している。私はこの作品を見て、現実をリアルに見ている感じがして、観ていて苦しい映画だと感じた。映画になるほどこの事件は悲惨であり、このようなことが日本の今の社会で実際に問題視されており、虐待は年々深刻化している。

## 2序論

警察庁が2月3日に発表した2021年の犯罪情勢統計によると、児童虐待の疑いで全国の児童相談所に通告された18歳未満の子どもは10万8050人で、過去最多を更新した。暴言、暴力を振るう心理的虐待が8万と最も多く全体の7割を占めている。令和3年度に児童相談所に寄せられた虐待相談件数は、同じく心理的虐待の割合が一番多く、二番目に身体的虐待の割合が多い。全体的にも、虐待相談件数が増加していることから周りから虐待を受けている子どもは減るどころか増加していることが分かる。

子育て支援情報みらいっこひろばによると、虐待が生じる一つの原因は、大人1人にかかる子育ての負荷が大きくなっていることである。では、なぜ大人1人にかかる子育ての負荷が大きいのか。虐待はなぜ発見されにくいのか。私の仮説はこうだ。地域のつながりの希薄化や社会の活動が子どもに行き届いていないことが、親の負担、そして子供の虐待に気づけない原因に繋がるのではないだろうか。そこで、本論では地域の希薄化はどのような影響をもたらすのかを明らかにする。そのために信用できるサイトや論文を見て地域との関わりは現在どう変化しているのか、社会は虐待から子どもを守るためにどのような活動を行っているの

か情報収集をし、さらに子どもと実際に触れ合い自分の仮説は正しいのか検証しようと思う。

### 3本論

社会では、子供を守り、子供のストレスを少しでもなくしてあげられるようにさまざまな活動が行われている。

例えば24時間電話で相談窓口を行なっている「子どもSOSダイヤル」がある。子供たちが全国どこからでも、夜間・休日を含めて、いつでもいじめやその他のSOSをより簡単に相談することができるよう、全都道府県及び指定都市教育委員会で実施している取り組みだ。

そして、2011年にできた子ども食堂は、ご飯が食べられない子どもや、その親、地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かい団らんを提供している。孤食や栄養失調の解決や、子供たちにとって安心できる場所だったり、他の人と話すきっかけになったり、ストレス発散になったりする場所とさまざまなメリットがある。

だが、このような活動をしているにも関わらず、今の日本の児童虐待の数は減るどころか年々増加している。また、子どもの虐待に周りの大人が気づけられず命を落としてしまうニュースをよく見る。

私が思うに、表では子どもがみんな助かっているように見えて、実は、社会のこのような支援が行き届いている子供はごく一部なのではないかと思う。

子ども食堂が有名になってテレビやマスメディアなどで多く報じられたことで、子ども食堂イコール貧困対策というイメージがついて同情されたくない等、通いづらいと感じている子どももいるのではないだろうか。国土交通省が、都市部、地方部における地域コミュニティの状況を把握するために平成17年に行った地域の人とどのくらい関わるのかという調査によると、15の都市は6割の人が地域と関わらず、町村では関わるが親しくはないと答えた人が4割だ。そもそも地域の希薄化が進んでいる理由は何か。国土交通省によると今までは地域住民が助け合って生活を営んできたと共に、災害発生時における地域の安全や安心の確保に重要な役割を果たしてきた。しかし、人口減少や少子高齢化、人口流動といった社会の変化に伴って、地域のつながりが希薄化し、地域コミュニティが衰退する傾向にある。

HITOTOWA 子ども総研によると、現代は核家族化や地域コミュニティの希薄化により、子育てを家庭だけで完結させがちだと言う。最近では近所の人と挨拶を交わさない、周りにどんな人が住んでいるのか知らない人も少なくないのではないか。そもそも虐待の要因には保護者の要因、子どもの要因そして環境の要因がある。保護者の要因は、育児不安、生活ストレス、病気や精神的に不安な状態が挙げられる。子どもの要因は、主に発達の遅れや障害だ。そして環境の要因には、不安定な夫婦関係、経済的不安、地域社会からの孤立がある。これらの要因を減らすためには、ご近所との身近な関わりが必要である。それは子育てをお互いに支え合える関係性を育むことだ。子育てに不安を感じている人や虐待をしてしまう人も周りに話を聞いてくれる人が1人でもいると何か変化があるかもしれないし安心できるだろう。地域には、保育園や児童館、地域子育て支援拠点や子育て支援の団体、公的サービスなど、さまざまな活動がある。親子で安心して楽しめる機会や、いざというときに子どもを一時的に預けることができるサービスは、保護者の負担軽減にも繋がるだろう。子どもたちが過ごしやすい、自分から悩み事を打ち明けたいくなるような環境を作るためには地域全体で子どもを見守ることが必要になるだろう。

一例として私の友達が始めた駄菓子屋を紹介する。

名前はColereという。Colereはラテン語で、文化、教養そして耕作の語源である。ここは幅広い年齢層の子どもが通っており、普通の駄菓子屋と違い、駄菓子が買える他に、学校の宿題を持ってきてやったり、好きな曲を楽器で弾いたり、海外の人が遊びに来て英語を教えた

り、晩御飯を一人で食べる時は一緒に食べたり、子どもたちの自主性を大切にしている。どのような目的で始めたのか話を聞くと、自分が子どもたちとコミュニケーションを取りたかったのと、子どもと大人、地域の人たち、みんなが平等に年齢を問わず関われる場所を作りたくて始めたそうだ。

ここに遊びに来て、その日に起こった出来事とか、ちょっとした話をして子どもたちの楽しい居場所になれば嬉しいと話していた。

私も遊びに行ったら、宿題を教えてあげたり、一緒に遊んだり、話をしたりしている。子どもと一緒に来ていた親御さんに話を聞くと、子どもに構ってあげられない時とかこういう場所があるとありがたいし、ここに遊びに行っていると安心して聞いて、子供にも親にとってもこのような場所があることはいいことだと思った。

#### 4結論

調査の結果、地域の希薄化が進むことで、子どもの声に気づけず、親の孤立等の影響が出ることがわかった。地域の希薄化を改善するためには近所の人と挨拶を交わしたり、ボランティアなど地域で取り組んでいる活動に参加するなど積極的に地域の人と交流することが必要だと思われる。

子どもの小さな変化に気づくためにも、地域全体で子供を見守り育てていくことが親の負担も減少し、子育てを一人で抱え込むことも無くなるので虐待防止に少しでもつながるだろう。そして、コロナ禍で人との接触を控えるべきだが、これから先地域と交流する機会を増やすことができるのか、子どもや親が助けの声をあげやすい社会を作ることが必要になってくるだろう。

#### 5終わりに

生活している中で、子どもの虐待に気づける機会は中々ないが、地域で関わる活動があることで、小さな変化に気づくことができるかもしれない。私一人が虐待をなくすことは不可能だけど、生活の中で困っている親子を見かけたら手助けをするなど些細な行動が、子育て中の親子の心の支えになるかもしれない。

これから周りに目を向けて生活していこうと思う。

#### 6参考文献・出典

- ・一般社団法人 日本家族計画協会2021年の児童虐待通告
- ・子育て支援情報未来っこ広場 子どもの虐待はどうして起きるの？
- ・文部科学省 いじめ問題など子供のSOSに対する文部科学省の取り組み
- ・gooddo 子ども食堂とは
- ・国土交通省 地域コミュニティの衰退に伴う課題
- ・HITOTOWA子ども総研 1人ごとじゃない、子ども虐待の今